

H. G. ウェルズ『透明人間』における ウエストエンドの服装描写

The Invisible Man Hunts for Clothes in the West End

坂井 妙子

Taeko SAKAI

(日本女子大学)

要約

『透明人間』(1897年)は通常サイエンス・フィクションとして読まれるため、衣服が注目されることはほとんどない。しかし、透明になった主人公(透明人間)はロンドン的高级商業・劇場地区ウエストエンドに実在する通りを歩き回り、デパートや衣装店に忍び込んで衣服を調達する。本論文では、透明人間をウエストエンドの案内人と位置づけ、特に男性読者にとってのショッピングガイドとして役割を果たしていることを明らかにする。

ウェルズは、寒空の中裸で歩き回る透明人間にウエストエンドが提供する4大娯楽—観光、ショッピング、演劇、食事—の全てを体験させることで、通常のガイドブックでは提供できない貴重な情報を提供する。特に、男性が買い物しやすい店、地区の詳細な情報を提供することで、男性読者のショッピングガイドとしての役割を果たす。このような記述は作品にリアリティーを与え、科学がいかに発達しても人間の基本的な条件を変えることはできないというメッセージを読者の心に刻む。

[Summary]

H. G. Wells's *The Invisible Man* is normally classified as a science fiction, and therefore, the protagonist's (the Invisible Man) clothing hunt has scarcely been taken notice. However, looking for proper clothing, the Invisible Man wanders about the West End and sneaks into an emporium and a costumier whose locations are clearly mentioned in the text. This essay traces the Invisible Man's clothing hunt in the West End and claims him as a competent shopping guide for man's clothing.

Wells offers the Invisible Man all of the entertainments that the West End could offer; sightseeing, shopping, theatres and dining. Invisible, naked and shivering in cold, the Invisible Man translates his experiences of these entertainments into a variety of valuable information for tourist which regular guidebooks could not offer. In particular, he teaches us good emporiums for male shoppers and reasonable costumiers in Covent Garden. These descriptions indicate that even the power of science was unable to alter our basic physical needs, while helping his invisible body look realistic.

1. はじめに

H. G. ウェルズ(1866-1946)の作品『透明人間』(1897年)は、通常サイエンス・フィクションとして読まれる。したがって、服装描写が注目されることはほとんどない。しかし、透明になった主人公(透明人間)はロンドン的高级商業・劇場地区ウエストエンドに実在する通りを歩き回り、デパートや衣装屋に忍び込んで衣服を調達し、その様子が詳述されている。ウェルズは10代の頃、

衣料品店に徒弟として勤めており、その時の経験を自伝に残したり、後年の作品に活かしていることが知られている。たとえば『キップス』(1905年)では、彼が勤めていたエドウィン・ハイド衣料品店(ハンプシャー州サウスシー)はフォークストンのエドウィン・シャルフォード衣料品店として登場し、キップスはここで徒弟奉公をする¹⁾。『透明人間』でも、忍び込んだデパートの閉店間近の描写²⁾は、ウェルズが務めていたサウスシーの大型洋品店の様子³⁾と酷似している。したがって、この作品でも、衣服やそれらを調達する店が重要な役割を果たすと予測できる。本論文では、衣服を探し求めて歩き回る「透明人間」をウエストエンドの案内人と位置づけ、特に男性読者にとってのショッピングガイドとして役割を果たしていることを明らかにする。主な資料として、19世紀末のロンドン中心部の地図、住所録、ガイドブック、百貨店や衣装店の広告と当時の書評⁴⁾を原作テキストとともに使用する。

2. ウェストエンド

本論に入る前に、19世紀後半のウェストエンドの特徴を抑えておく。エリカ・ラパポートは著書『お買い物は楽しむため』(2000年)の中で、19世紀末までには、ウェストエンドは「ある特別な領域」と認識され、そこは「都市での一日、派手な夜の遊び、一週間の買い物三昧、観光のための場であった」⁵⁾という。ウェストエンドはショッピング、観光、夜の外出(ミュージックホールや観劇に繰り出すこと)と食事の全てを一緒に楽しむことができる極めて特殊な消費の場であったのだ。中でも、本論文で大きく取り上げるショッピングは、すでに1860年代までにはウェストエンドを訪れる品の良い女性の娯楽となっていた。ラパポートは通りの名前を挙げて、以下のように指摘する。

一八六〇年代までには、「淑女たち」はウェストエンド、とくに、リージェント・ストリート、オクスフォード・ストリート、オールドボンド・ストリートとニューボンド・ストリート、ストランド、ピカデリー、バーリントン・アーケード、レスター・スクウェア、トッテンナム・コート・ロードで買い物をしていた。これらの通りが集散的に捉えられ、ヨーロッパでもっとも豪華なブティックや革新的な店、快楽的な慰みがある場所として有名になった⁶⁾。

世紀半ばすぎには、衛示的消費のメッカとしてのウェストエンドが確立していたのである。そして、19世紀末までには、これらの通りに展開する百貨店は買い物のための時間、体力、気力を節約できる近代的なシステムとして女性客から高く評価されるようになった。レディー・ジュンはエッセー「ショッピングの倫理学」(1895年)の中で、ウェストエンドの百貨店で買い物をする利点を次のように述べている。

欲しいものすべてを一軒で買うことができる便利さは大変大きい。交通手段が容易になったので、以前よりもより多くの人々がロンドンへやってきて、買い物をするために中心地へ来る。人々は気力を集中させることができる場所、疲れないような場所で買い物をすることを好む⁷⁾。

では、19世紀末、裕福でおしゃれに敏感な女性たちは最新のファッション情報をどのように入手したのだろうか？彼女たちは『クイーン』(1861-1970)や『レディーズ・ガゼット・オブ・ファッション』(1842-94)などの高級ファッション誌から情報を仕入れた。これらの雑誌は毎号、ロンドンとパリの最新ファッションとそれらを提供する店の情報(ロンドンの場合は圧倒的にウエストエンドの店)を掲載していたからだ。一方、独身男性のための娯楽や消費習慣に関する情報は『デイリー・グラフィック』紙、『デイリーメール』紙、『メール』紙などの紙面上で提供されるようになったが⁸⁾、男性服を購入する場合には用心が必要だった。新奇さは必ずしも品質を保証せず、時に職業上の信頼やリスペクタビリティを欠く危険さえあったからである。1860年代、70年代の「洒落者」(heavy swells)、80年代の「伊達男」(mashers)や90年代の「めかしや」(knuts)などがオシャレだが安っぽく、どこか品のないファッションナブルな男性像として名高い⁹⁾。要するに、身にまとうものは男女の別なく消費文化と密接に結びついていたが、社会的地位を表すために「適切」と見なされる男性服は、単に流行りの店で一番売れているものを入手すれば済んだわけではなかったのである。このことは、衛生的消費のメッカ、ロンドンではなおさら注意すべき点だった。

次に、ロンドンを訪れる旅行者が参照するガイドブックに目を移してみよう。ショッピング情報はどのように扱われていたのだろうか？実はほとんど掲載されていない。人気ガイドブック、ジョン・マレー社編『ありのままのロンドン・ハンドブック』(1879年)を見ても、首都ロンドンの歴史や気候、交通機関、名所旧跡、ホテルやレストランの格付け、劇場、コンサートなどのアミューズメント情報は項を立てて詳述されているが、買い物情報はない。オックスフォード街の説明でさえ、通りが作られた経緯や歴史的人物の住居地の記述ばかりで、流行りの専門店や大型百貨店の情報はない。唯一、リージェント街の地図に大型洋品店、ルイス・アンド・アレンビーとスワン・アンド・エドガーの位置が記されている程度である¹⁰⁾。参照した版には1884年版の付録がついているので、このガイドブックは版を重ね、しばらく市場に出回っていたと考えられるが、ロンドンでのショッピングには役に立ちそうもない。『ロンドンの光景、挿絵入り』(1883年)も同様に、具体的なショッピング情報は扱わず、「リージェント街の両側にはロンドンでもっとも素晴らしい店のいくつかが並び、かなり立派に飾り付けられ」、「オックスフォード街は両側を最高の店が連なっている」などの説明に留まっている¹¹⁾。『ロンドン・コンサイス・ガイド、地図付き』(1885年)ではさらにそっけなく、「オックスフォード街、リージェント街W、マーブル・アーチからトッテンナム・コート街まで」、「リージェント街、ウォータールー・プレイス、ペル・メルSW、ハイパーク・コーナーからピカデリー経由、リージェント・サークル、そして右へ」¹²⁾としか説明されていない。

ショッピング情報が欠けている一方で、ガイドブックにはロンドンを効率的に散策する方法が複数掲載されている。『ありのままのロンドン・ハンドブック』では、「ロンドンを手取り早く見るには」と「ロンドンをのんびり見るには」の二種類が提案され、前者は乗合バスを使う「経済的」且つ、時間のかからない方法と説明される。プロンプトン、またはハマースミス線でバンクまで向かう西東ルートと、カムデン・タウンから南に下る北南ルートが示されている。いずれも、運転手脇のボックス・シートに陣取り、効率的に眺めを楽しむ方法だそうだ。西東ルートでは、行きはピカデリー、チャーリング・クロス、ストランド、フリート街、チープサイドを通り、帰り

はパディントン線に乗り換え、ホルボーン、高架橋、オックスフォード街、マープル・アーチへと戻る。北南ルートのウォータールー線では、カムデン・タウンからリージェント街、チャーリング・クロス、ストランドを過ぎ、ウォータールー橋まで行く。または、アトラス線を使い、スイス・コテージからベーカー街、オックスフォード街、リージェント街、チャーリング・クロス、ホワイト・ホール、パラメント街、ウォータールー橋を渡り、エレファント・アンド・カッセルへ至るルートが提案されている¹³⁾。いずれも「首都の特徴的な建築物をさっと見る」のに適しているとガイドブックは述べるが、ロンドン中心部の観光、ショッピング、そして後で述べるように演劇、レストラン街を東西、南北に通ることになる。「のんびり見るには」の方は、ロンドン・ブリッジからトラファルガー・スクエアまで名所を見ながら徒歩での散策だが、トラファルガー・スクエアで終了ではなく、官庁街であるホワイト・ホール、ベル・メル、そしてショッピング街のリージェント街まで足を延ばす¹⁴⁾。

『透明人間』が世に出た頃のウエストエンドは、おおよそこのように捉えられていた。作者ウェルズは就職に何度も失敗した後、サウス・ケンジントンにあったノーマル・スクール・オブ・サイエンス(現ロイヤル・カレッジ・オブ・サイエンス)で科学を学び、一度地方に出た後、1888年に再びロンドンに戻ってくる。教師として生活する傍、作家としての道を目指すためだった¹⁵⁾。ウェルズがロンドン中心部の地理に詳しくたことは間違いない。

3. 透明人間が周遊するウエストエンド

(1) 「透明人間」とはどのようなキャラクターか？

「透明人間」は、本人の説明によるとオックスフォード大学ユニヴァシティ・カレッジで化学を専攻し、優秀な成績を修めた後、光の研究に勤しむ。そこで物質を透明にするアイデアを思いつくが¹⁶⁾、アイデアを秘密にし、研究を続けた。それは「一夜にして有名になってやろうと考えていた」¹⁷⁾からだった。つまり、当初彼は名声に飢えた、社会階級的にはプロフェッショナルクラスの卵であった。しかし、猜疑心が強く反抗的だったために、研究室を主宰する教授とそりが合わなかった。教授にアイデアを横取りされるのではないかと妄想しつつ、「貧乏に打ちひしがれ、田舎の大学で馬鹿者どもを教えている自由のないみじめな研究者」¹⁸⁾と自らを哀れんだ。経済的にも情緒的にも、不満を募らせたひねくれ者になっていったのである。3年経ったところで研究資金が底をつき、父親の金を盗む。ロンドンへ移り、研究を継続させるためだったが、他人の金を盗んだ疑いをかけられた父親はそれを苦に自殺してしまう。透明人間はそんな「父を気の毒だとは思わなかった。」¹⁹⁾。

ロンドンでは、グレート・ポートランド街(Great Portland Street)近くの安下宿に身を寄せ、実験を続けた。大家と部屋の使い方を巡って悶着を起こす一方で、自分を透明にする実験を実行、成功する。実験の証拠隠滅と大家—「灰色の長いコートに、腐ったようなスリッパを履いたポーランド系のユダヤ人」²⁰⁾—に対する復讐を兼ねて下宿に放火する。その後、透明であることを利用して窃盗、恐喝、強盗をはたらく。いつしか彼の野望も、恐怖政治による世界制覇²¹⁾へと変わる。かつては不遇の研究者であることをナルシスティックに誇っていた彼だが、世間に対する逆恨みを増長させ、誇大妄想に取り憑かれたアナーキストになっていったのである。

もっとも、透明であれば人と認知され難く、日常生活にも著しく不便をきたす。そのため、グ

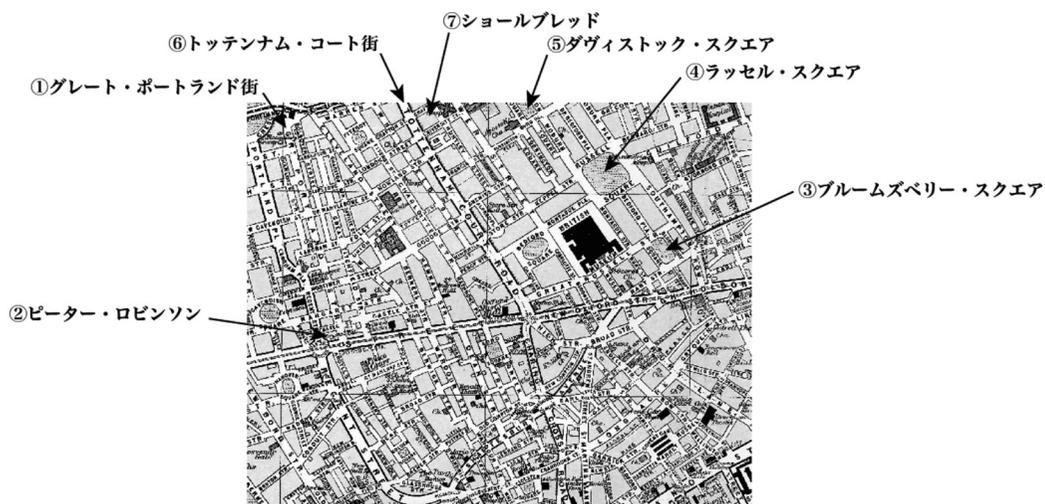


図1 ①～⑦ウエストエンドの地図（1896年ごろ）

レート・ポートランド街そばの下宿を放火した後、ウエストエンドを逃走しながら、衣服の調達を試みるのである。グレート・ポートランド街とは、オックスフォード街(Oxford Street)とリージェント街(Regent Street)が交差するウエストエンドの中心からブルームズベリー方向に一ブロック東を通り、南をオックスフォード街、北をポートランド・ロード駅(現グレート・ポートランド・ストリート駅)に接する大きな通りである(図1①)。

透明人間はその教養の高さと誇大妄想から、マッド・サイエンティストの典型のように見える。では、彼がウエストエンドのデパートや衣装店に忍び込んで衣類を盗む場面は、後に行われる様々な犯罪を際立たせるための場つなぎに過ぎないのだろうか？ウエストエンドを歩き回るこの場面は時系列的には物語の始まりに当たるが、作品の中では後半部分、第20章から23章にあたり、すでに読者は彼の様々な悪事を読み知っている。此の期に及んで、ウエストエンドで服を探す詳細な描写がなぜ必要なのか？実際、否定的な見解を示す研究者が多い。例えば、作品の反資本主義的モラルを強調するポールA. カンターは、透明人間が生き延びるためにお金を盗むだけでなく、食べ物や衣類に依存することで、透明人間が置かれた状況はわかりにくくなると指摘する²²⁾。オ・ドンガイルも、透明人間がアナキズムや過激な傾向があるにも関わらず、百貨店に潜伏して一夜を明かすことを「物質資本主義のスペクタクルに奇妙にも依存している」と述べ、百貨店の「小売販売活動やスーパー・ストアといみじくも名付けられた文化の均質性が、彼が表象し始めたある種の過激な政治活動を蝕んでいることに、彼は気づいていない」²³⁾と言う。対して、本論文では別の見解を参照し、考察を進めたい。一つは主人公が実在する通りを歩き回って衣服を調達することで、透明であるという信じがたい現象にリアリティーを与える点である。マーティン・ステープンも指摘するように、主人公が透明になるというこの小説の突飛な主題は、彼を取り巻く人々や出来事のまともさ、平凡さによって信憑性が増すのである²⁴⁾。もう一つは、作品の大きなテーマ—科学と人間—に関わる。作者は科学の力に警告を発する一方で、基本的な人間性を変えることはできないというメッセージ²⁵⁾を発するが、主人公のウエストエンドでの衣服調達はこのメッセージを極めて印象深く読者の心に刻むのである。次節では、これらを具体的に考察する。

(2) 観光：下宿からオムニウムまで

ロンドンに出てきた透明人間がグレート・ポートランド街近くに住んでいたことはすでに指摘した。彼によれば、それは「貧民街」²⁶⁾だったが、そばに「大きな服地屋」(the big draper's shop)があったという。この辺りで最大の洋品店は、1833年創業のピーター・ロビンソン(103 Oxford St.) (図1 ②)である。ピーター・ロビンソンは世紀半ばに店を大きく拡大し、早くも1856年には「宮廷用婦人帽子、マント、ドレス・メーカー、未亡人や家族用、子供用喪服専門店」²⁷⁾と名乗っていた。『イラストレーテッド・スポーティング・アンド・ドラマティック・ニュース』誌(25 Apr. 1896)掲載の同社の広告(図2)では、男性用下着の特別セールを唄っており、掲載さ

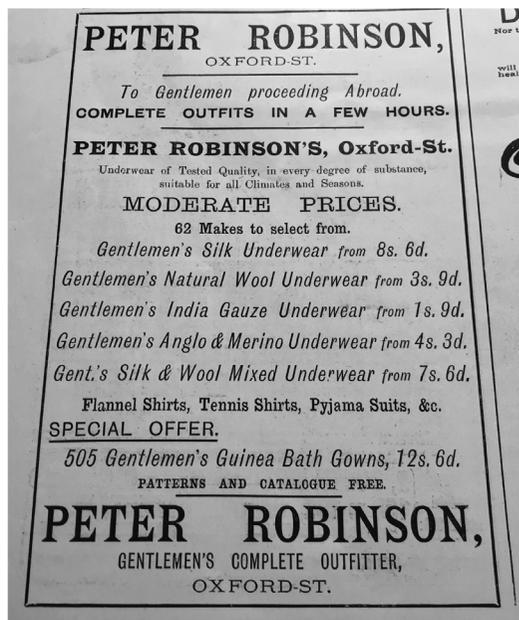


図2ピーター・ロビンソンの広告(1896年)

れた雑誌の性質から²⁸⁾、同店は裕福な女性だけでなく、男性にも馴染のある洋品店だったと推測できる。ほかに、隣接するモーティマー街(Mortimer Street)にはメトロポリタン・ストア・カンパニー(Mortimer St. 58)が「服地屋」(draper)として『郵便局ロンドン住所録1895年版』²⁹⁾に登録されているが、透明人間は下宿を放火した後、通りを南下してオックスフォード街へ出るので、同街角に位置するピーター・ロビンソンの方が目にとまるだろう。

下宿を出て、とりあえずオックスフォード街に南下した透明人間だったが、裸のまま雪のちらつく真冬のロンドンを徘徊するのは極めて都合が悪かった。透明なので人につつかられ、馬車に轢かれそうになり、その上、寒さのために風邪をひく。透明になったら、やりたい放題!と思っていた彼だったが、「透明人間になっても天候には勝てないことを計算に入れておかなかったのは我ながら愚かだった。」³⁰⁾と、早々に後悔することになる。ここで重要なことは、マーティン・ステューブスが「解放」と「限界のコメディ」と指摘するように、主人公が透明になる実験を重ね、自ら成果を試したのは貧困や世間に認められない不満、不安を断ち切り、全く新しい未来へと進むためだったが(解放)、透明になっても自身の弱さや欠陥のために完全には自由になれない点にある(限界のコメディ)³¹⁾。主人公が衣服を調達するためにウエストエンドを歩き回るようになるのは、過激な政治信条や社会に対する恨みからではなく、また、有閑マダムのように買い物が好き!というような娯楽の範疇でももちろんなく、「裸では寒すぎる」という差し迫った、そしてありふれた身体的欲求によるものである。財力のない若い下層中産階級の男性が「仕事に着ていくジャケットがくたびれきってしまったので、新調しなくては」と思い、買いに出るよりもさらに情けない。透明になったからといって、人間としての基本的な条件を変えることはできなかったのだ。

透明人間が暑さや寒さを感じ、服を着用せざるを得ないという設定は、W. S. ギルバート(1836-1911)が雑誌『ファン』に掲載した詩「透明であることの危険」('The Perils of Invisibility') (掲

載年月不明)に負っている³²⁾。しかし、ギルバートの詩ではある男が願掛けによって幸運にも透明になったのに対し、ウェルズは科学的な実験の成果として主人公を透明にした。そうすることで、素晴らしい発明、科学の発達にも関わらず、気候から体を守るというあまりにベーシックな条件に屈せざるを得ない人間の弱さが強調されることになった。ウェルズ自身、作品について以下のように説明している。

主題はある男が生体を透明にすることが出来るというもので、それはギルバード氏の「バブ・バラッド」の一つですでに使われている。しかし、私の作品では、透明になることは魔法によってではなく、視覚の科学を応用する結果であり、それは服や彼に降りかかるいかなるものにも及ばず、また、吸収される前の食べ物にも及ばない。ストーリーはこの主題を一貫して現実的に扱い、実験者[透明人間]は極度に自己中心的で激しやすい人物として表されている³³⁾(下線引用者)。

実際、ウエストエンドに実在する通りを歩き回る透明人間の体験は、透明になったら遭遇しそうな困難の連続であるが故にユーモラスで、一層印象深くなる。まず、透明人間は空の馬車に忍び込み、オックスフォード街から Tottenham Court Road を過ぎて、ブルームズベリー・ウェイ (Bloomsbury Way) へと広い通りを東へ向かった。「ミューディー書店」(所在不明)の前で女性が馬車に乗り込んできたため、慌てて飛び降り、大英博物館北側の人通りの少ない場所に向かうべく、ブルームズベリー・スクエア (Bloomsbury Square) に進む(図1③)。しかし、「しかしスクエアの北の端」で、「薬剤師協会」(the Pharmaceutical Society) から出てきた子犬に追いかけられ、グレート・ラッセル街 (Great Russell Street) を西へ、モンターギュ街 (Montague Street) に沿って走って逃げる途中、さらなる災難が待ち受ける。すぐ北のラッセル・スクエア (Russell Square) から救世軍の団が音楽とともにやってきたのだ(図1④)。

この団を無事にやり過ごす自信がなかった透明人間は、モンターギュ街の西側、大英博物館に面した家の白い階段(玄関に続くステップ)を走って登る。しかし、塗り替えられたばかりのステップに足跡を残してしまい、不審に思った少年たちに追いかけられる。追いかける人数はどんどん増え、ラッセル・スクエアを2周、3周して必死に逃げる。ラッセル・スクエアはかなり大きなスクエアで、一周するだけでも、歩いて7-8分は掛かる。その後、スクエアの北側からさらに北へ、タヴィストック・スクエア (Tavistock Square) へ逃れる(図1⑤)。

このスクエアに辿り着いた透明人間に、暖をとるための「素晴らしいアイデア」が浮かんだ。

ガウアー街 (Gower Street) から Tottenham Court Road へ続く通りの一つを進み、オムニウム百貨店 (Omniiums) の前へ出た。そこはなんでも手に入る大きな店で、肉、野菜、リネン、家具、服、油絵さえも手に入る。一軒の店というよりは、巨大な曲がりくねった店の集まりだ³⁴⁾。

Tottenham Court Road 沿いにある百貨店に忍び込み、衣服を調達することを思いついたのである。タヴィストック・スクエアからガウアー街を通して Tottenham Court Road へ行くためには、

ユニヴァシティー・カレッジの南、フランシス街（Francis Street：現在ではトリントン街）を経由して、ほぼ一直線に行くことができた。または、ガウアー街からユニヴァシティー街（University Street）かグラフトン街（Grafton Street）を西へ進み、トッテンナム・コート街へ出たかもしれない（図1⑥）。

透明人間が辿った道程で、唯一地図上で探すことができなかった通りは（参考にしたのは『ロイヤル・アトラス・オブ・イングランド・アンド・ウェールズ』c1896³⁵⁾）、ブルームズベリー・ウェイである。この通りは1896年当時、ハート街（Hart Street）だった。また、ブルームズベリー・スクエアの北の端にあるとウェルズが説明した「薬剤師協会」は同ハート街に面した17番地に所在が確認できるため³⁶⁾、南側だった。これらの例外を除けば、実際の通りや位置関係との齟齬はない。驚くべき正確さと言える。

このように、ウェルズは実在するロンドン中心部の通りを透明人間に周遊させることで、ガイドブックのごとく、読者にウエストエンド観光の楽しみを提供している。それは「ロンドンを手取り早く見るには」の透明人間版と呼ぶにふさわしい。透明人間は人にぶつかったり追いかけられたりするので、その視点は通行人を傍観するフラヌールではない。また、空中から下界を見下ろすパノラマ・ビューを提供するでもない。そうではなく、読者は透明人間が寒空の中、裸で歩いた通りを辿ることで、旅行者気分ウエストエンド北東部を消費することができた。リンダ・ニードによると、「ロンドンの通りは店、人混み、広告を含め、都市を観光向けに示した。架空のツアーであれ、ガイドブックを使ってのものと実際的なものであれ、通りは旅程の一部だった」という。これに世紀中葉に発達した鉄道が加わり、1860年代にはロンドンは「近代的なツーリスト・センター」になった。結果として、ロンドンは「視覚体験として消費される」³⁷⁾ようになったが、透明人間が案内するロンドンにはさらに一歩進んでいる。「透明」であれば旅行者の視界を遮らず、しかも生身の肉体を備えた主人公が大英博物館周辺などの観光スポットを文字通り体を張って案内するとなれば、観るだけでなく、音（救世軍の音楽）、匂い（子犬に匂いを嗅ぎ回られる）、触感（雪の中を裸で歩く）、そして後には味覚も加わる。これほど多くの感覚体験としてウエストエンドが提示されたことはかつてなかっただろう。

さらに、透明人間が周遊を始めたオックスフォード街はウエストエンドのショッピングの中心であり、トッテンナム・コート街は東の端に位置した。透明人間が通ったオックスフォード街、大英博物館、そこからすぐのトッテンナム・コート街は旅行者ならば必ず訪れる観光スポットであるが、実際にショッピングを楽しむ消費の場でもあったのだ。

(3) オムニウム百貨店でのショッピング

トッテンナム・コート街にあったとされるオムニウム百貨店は架空の店である。オムニウムという名前の大型洋品店を『郵便局ロンドン住所録』で見つけることはできないからだ。通りの名前、建物の位置関係をあれほど正確に記しているにも関わらず、架空の百貨店を登場させた理由は、透明人間はこの店でこっそり一夜を明かした後、強盗をはたらき、商品を多数破壊するので、実在する店を登場させると営業妨害になると考えたからかもしれない。とはいえ、オムニウムのモデルを通りから同定することは比較的容易である。第一に、ヨーロッパ随一のショッピング街、ウエストエンドといえども、19世紀末当時、百貨店³⁸⁾と呼べる規模の店はそれほど多くはなく、

トッテナム・コート街にあった大型店は、1810年創業のヒール・アンド・サン(Heal & Son), 1817年創業のショールブレッド・ジェームズ・アンド・カンパニー(Shoolbred James & Co.) (図1-⑦), 1842年創業のメープル・アンド・カンパニー(Maple & Co.)の三軒である³⁹⁾。しかし、ヒール(現在も同じ場所で営業)とメープルは家具屋だったから、リストから除外される。

一方、ショールブレッドは「初期の百貨店の一つで、紳士洋品商と生地屋(outfitters and drapers)から商いを始め、室内装飾、カーペット、後には食料品、おもちゃまで扱う」⁴⁰⁾ようになった。アドバーガムによれば、ショールブレッドは19世紀半ばに事業を大幅に拡大し、すぐ隣で商っていたメープルに匹敵するほどの家具や調度品も扱うようになったという⁴¹⁾。図3(1840年制作)はショールブレッドのファサードである。ウィンドーには生地がディスプレイされ、ファッショナブルな装いの女性客の姿が見える。上の階に比べると

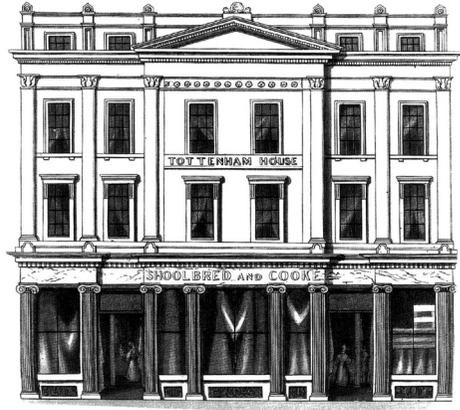


図3ショールブレッドのファサード(1840年ごろ)

グランドフロアの天井は高く、高級な店構えであることがうかがえる。また、図4は『クイーン』(4 Jan. 1896)掲載のショールブレッドの広告である。左が引越しサービスの広告、右が毛皮のトリミング付き、シルク製の女性用マントの広告である。様々な商品、サービスを提供していたことがわかる。

ショールブレッドは、男性である透明人間が衣類を調達する百貨店のモデルとしても最適である。ウエストエンドの他の百貨店、たとえば、デベナム・アンド・フリーボディーもよく知られた店だったが、ショールブレッドが紳士洋品と生地を扱うことから始めたのに対し、1778年創業のデベナム・アンド・フリーボディー(創業当初はフリント・アンド・クラーク)は女性服に

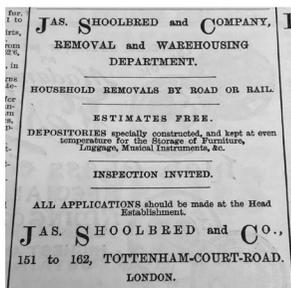


図4ショールブレッドの広告(1896年)



使われる生地を扱う店(drapery shop)からスタートした⁴²⁾。オックスフォード街103番地に構えるピーター・ロビンソンもリネンを扱う呉服屋(linen draper)から事業を拡大した⁴³⁾。さらに、デベナム・アンド・フリーボディーがあるウィグモア街は、高級な女性服を仕立てるドレス・メーカーが多く商っていた。『郵便局ロンドン住所録1895年版』によると、ウィグモア街の南側59軒中14軒、北側63軒中19軒がドレス・メーカー、宮廷用ドレス・メーカー、または婦人帽子屋だった。驚くべき密集状態である。透明人間が忍び込んだ頃のショールブレットは百貨店として幅広い商品を扱っていたが、店の沿革と地理上の特徴を勘案すると、男性消費者が入りやすい店だったと考えられる。

ショールブレットは売り場の拡大方法、その結果としての店内のレイアウトにも格式があり、この意味でも手堅い百貨店だった。百貨店の発展の仕方には二種類あり、一つは、四半世紀以上の歴史を持つ伝統店が、扱う品物やサービスを徐々に拡大し、売り場を拡張する方法である。もう一つは、数年のうちに急成長した企業が売り場部門ベースで販売を計画し、経営する方法である⁴⁴⁾。前者は徐々に建て増しをするので、異なる店の集まり(a string of separate shops)のようであり、後者は専用の建物(purpose-built)だった⁴⁵⁾。ショールブレットは食料品店から拡大したハロッズなどととも、前者の典型である⁴⁶⁾。つまり、伝統ある知名度の高い百貨店であった。後者の典型は1877年にロンドンのブリックストン創業のボン・マルシェである。透明人間によると、オムニウムは食料品から油絵まで揃う「大きな店」で、「一軒の店というよりは、巨大な曲がりくねった店の集まりだ」というから、まさにショールブレットを思わせる。要するに、透明人間が忍び込んだのは「めかしや」を相手にする下町の安物洋品商でもなく、女性客でごった返すウィグモア街の百貨店でもなく、元々男性客を大切にしてきた老舗百貨店だったのである。

このような百貨店で扱う商品は当然、ハイクオリティーだった。透明人間はオムニウムに忍び込むと、真っ先に靴下と手袋の売り場へ行き、「ラムズウール製のパンツとアンダーシャツ」(lambswool pants, and lambswool vests)⁴⁷⁾を手に入れる。ウール製の下着はドイツの衛生学者、グスタフ・イエーガー(1832-1917)が提唱したことで知られる健康衣料である。イエーガーはウール製品を肌に直接着けることで健康を維持できると主張し、ウール製のコンビネーション下着の大流行をもたらした⁴⁸⁾。信奉者の多くは、見識あるアッパークラスの禁欲的な人、または進歩的なインテリであったという⁴⁹⁾。後者には劇作家、ジョージ・バーナード・ショー(1856-1950)が含まれる。ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館提供の資料によると、1894年までには、脇下に通気のための穴を空けたラムズウール製のベスト(waistcoat)がシルク製やラムズウール製のアンダーシャツとともに入手可能になった。また、多くの男性は上下そろいのアンダーシャツとパンツを好んだという⁵⁰⁾。透明人間はわざわざ「ラムズウール製のパンツとアンダーシャツ」と言っていることから、暖かく健康的で、話題の良品を選んだことがわかる。これを選んだ透明人間は知的で、おそらく進歩的であることも示唆するだろう。

次に、透明人間は「ソックス、厚手の襟巻き」(socks, a thick comforter)を盗み、衣服売り場に移動した後、ズボン、ラウンジ・ジャケット、オーバーコート、スラウチ・ハット(柔らかく広いブリムがつき、前でブリムを下へ折って被る帽子)(trousers, a lounge jacket, an overcoat and a slouch hat)を失敬する。そしてようやく、「人間らしい気分を取り戻した」⁵¹⁾と告白する。「ラウンジ・ジャケット」とは、シングル丈の短いインフォーマルな上着で、前開きは3つ、ないし4

つのボタン留め、ポケットが4つ付く。1890年代後半には、よりフォーマルで着用者の身体にフィットしたモーニング・コートやフロック・コートを抜いて、広く着用された⁵²⁾。服飾史家、クリストファー・ブルワードは、「ラウンジ・スーツは一種類の生地でき、角ばっていて、均一のフィット感だが、安く目新しいものを気軽に求めることを示すのではなく、より民主的なスタイルへと純粋に進んだことを示している」⁵³⁾と評価している(図5)。透明人間は百貨店で吊るしの服を盗んだわけだが、比較的ゆったりしたインフォーマルなラウンジ・ジャケットは流行していただけでなく、男性服の民主化に貢献した進歩的な衣服だったのである。

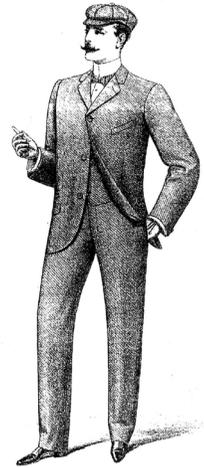


図5 ラウンジ・ジャケット (1897年)

透明人間にとって衣服の調達は、金を盗んだり、預けてある本や小包を取りに行くこと、どこか住む場所を探すことよりも重要だった。食べ物の調達でさえ、衣類を整えた後だった。つまり、衣類の調達が最重要課題であるが故に、適当な服が見つかって、「人間らしい気分を取り戻した」のである。一方で、彼がオムニウムに忍び込んだのは、「容認できる姿に変装するための服を手に入れる」⁵⁴⁾ためである。欲しいものを入手したらそれで用は済んだわけで、これはウェルズが自身の衣料品を購入する時の態度と基本的に同じである。ただし、彼は品質や値段の妥当性、社会的地位にふさわしいものかどうか不明の品を店員に押し付けられた経験から、洋品店の店員をひどく軽蔑していた⁵⁵⁾。対して、透明人間は商品知識に長け、適切な買い物をする消費者の視点と行動を展開した。そうすることで、透明人間は通常女性的と定義される百貨店での買い物(消費行動)の領域内で、男性的な消費行動のモデルを提案したと言えるのではないだろうか。従来、ショッピングに対する男女の感覚は著しく異なると信じられ、女性にとってショッピングは魅力的だが、男性にとってはそうではなく、『クイーン』(2 Apr. 1892)によると、「原則として、男性は自分が欲しいものだけを買ひ物で手に入れる。女性的な男性(the effeminate masher-creature)でさえ、通常の女性のように買ひ物はしないし、実に男性的な男性は、まず自分で買ひ物などまったくくない」⁵⁶⁾という。これを受けて、「買ひ物好きか否かは根本的なジェンダー差異の指標として機能していた。」⁵⁷⁾とラパポートは結論するが、透明人間は先にレディー・ジューンが力説した百貨店の利点—「ほしいものすべてを一軒で買うことができる便利さ」—を最大限に利用し、良品を手取り早く、下着から順番に必要なものだけ揃えることで、「容認できる姿」、つまり、尊敬に値する男性らしさを獲得したのである。

(4) 劇場街探索とストランドでの食事

オムニウムで一通り衣服を揃えた透明人間だったが、一夜明けると上階に潜んでいたことが発覚し、大急ぎで衣服を脱ぎ捨て、逃走しなければならなかった。一から衣服を調達し直さなければならなくなったわけである。また、透明な顔を何かで覆って目立たなくする必要もあった。そこで向かった先はコヴェント・ガーデンの演劇・仮装舞踏会用衣装を扱う店(theatrical costumier)である。

レスター・スクウェアの東に位置するストランド地区(コヴェント・ガーデンはその中心)はウエストエンドの劇場街である。同地区には、コヴェント・ガーデン劇場(Convent Garden Theatre)、ドルリー・レーン劇場(Drury Lane Theatre)、ライシヤム劇場(Lyceum Theatre)、アデルフィー劇場(Adelphi Theatre)など有名劇場が密集し、これから考察するように、周りには演劇衣装や仮装衣装を扱う店が数多くあった。もっとも、劇場街の衣装店で衣類を調達しようとする透明人間は、仮装する機会がほとんどない現代の我々の目には奇怪である。しかし、作品が書かれたヴィクトリア朝後期とそれに続くエドワード朝期には、仮装舞踏会やアマチュア演劇が盛んに行われ、仮装は社会に広く開かれた楽しみになっていた⁵⁸⁾。アマチュア演劇の指南書も数多く出版され、衣装を節約して整える方法を伝授するものまで現れた⁵⁹⁾。そのために、当時の読者にとって、透明人間が衣装店を巡って変装を完成する描写は興味深いトピックだったはずだ。

加えて、観劇は観光、ショッピング、食事とともにウエストエンドが提供する娯楽の一つで、特にショッピングとの結びつきが強かった。19世紀末から20世紀のはじめには「買い物と観劇は、統合された消費形態」であり、「ウエストエンドにおいて、イメージを購入することと商品を購入することは重なり合い、互いに強め、増幅する経験であった。」⁶⁰⁾と、ラパポートは指摘する。『透明人間』では、主人公が演劇街をさまよい、目当ての衣服を調達することで、擬似ショッピングを遂行した。

オムニウムから逃げ出し、トッテナム・コート街を南下した透明人間は、ストランドの北側にあるベッドフォード街で人におつかって馬車に轢かれそうになり、東に位置するコヴェント・ガーデン・マーケットへ逃げ込む⁶¹⁾。その後さらに東へ、「ドルリー・レーン近くの小路にある小さな薄汚れた店」に押し入った。記述によれば、この付近に「演劇用の貸衣装屋が何軒かあるのを知っていたからである。」⁶²⁾。押し入った店は老舗百貨店、オムニウムとは対照的に安物の中古品を扱う、うらぶれた店だった。

そこはドルリー・レーン近くの小路にある小さな薄汚れた店で、ショーウィンドウには舞台用のキラキラ光る服、模造の宝石、かつら、上靴、仮面、舞台写真などが飾ってあった。四階建てのビルの一階にある店は古臭く、天井は低く、内部は暗かった⁶³⁾。

透明人間は店主を縛り上げ、古着、仮面、色眼鏡、白髪混じりのヒゲとかつらを盗む。下着は見つからなかったのので、後で買うことにし、「キャリコ製のドミノ」(calico dominoes: フード付きの衣装で、顔の上半分が隠れ、目の部分だけがあいたマスクがついているもの、またはマスクのみをさす)と「白のカシミアのスカーフ」(some white cashmere scarfs)で頭を覆った。靴下も見つからなかったが、店主の靴を靴下なしで履くことにした。また、当初は「白粉、口紅、絆創膏」も盗んで仮装に使うつもりだったが、落とすのに手間がかかるために、透明になる必要があるときに「不利」と判断して諦めた⁶⁴⁾。

『郵便局ロンドン住所録1895年版』および同1896年版を調べると、コヴェント・ガーデン・マーケットを中心にした1kmに満たない範囲(ロング・エーカー、ドルリー・レーン、ストランド、セント・マーティンズ・レーンに囲まれた地域)(図6)に、「演劇および仮装衣装屋」(Theatrical &

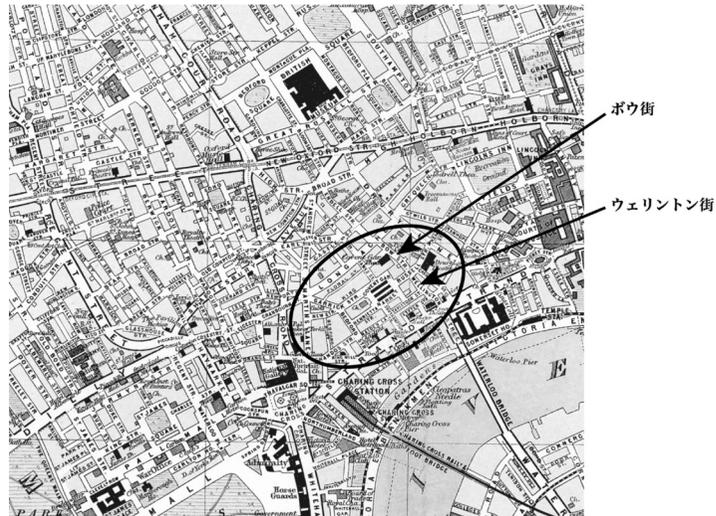


図6 コベント・ガーデン・マーケット周辺 (1840年ごろ)

Fancy Costumiers)の登録が非常に多いことがわかる。ロンドン全体で29店の登録があったが、そのうち11店がこの範囲内にある店だった。歩いて数分のピカデリー地区を含めると、13店にも及ぶ(表1)。中でも、コヴェント・ガーデン劇場に接するボウ街(Bow Street)、ライシヤム劇場があるウェリントン街(Wellington Street)沿いに衣装店が密集している。ボウ街とウェリントン街は透明人間の記述通り、「ドルリー・レーン近くの小路」でもある。

ボウ街とウェリントン街で、『郵便局ロンドン住所録1896年版』に「演劇および仮装衣装屋」(Theatrical & Fancy Costumiers)として登録された店は6店ある。中でも、ボウ街31番地にあったハリソン社(Harrison Limited)、ウェリントン街45番地のW. クラークソン (Clarkson Wm.)、同26番地にあったホルツ (Holz Carl.)は「かつら製造者」(Wig makers)または、「演劇用かつら製造者」(Theatrical Wig makers)としても登録しており、かつらを主力商品に加えていたことがわかる。他店は単に「衣装店」(costumier)と謳っていることから、ボウ街とウェリントン街にこの種の店が集まっていたことになる。透明人間も演劇用のかつらを失敬した。

模造宝石や「舞台用のきらきら光る服」(古着)を扱う店も多数あった。1880年代から1900年代

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1) Auguste Miss Patience, 27 Wellington St. 2) Besford Mrs. Elizabeth, 90 Long Acre 3) Clarkson Wm, 45 Wellington St. Strand 4) Fisher Miss Mary E. 26 Bedford St. Covent gdn. 5) Gascoigne Madame Edith, 20 King St. Covent gdn. 6) Hales Thomas, 40 Wellington St. Strand 7) Harrisons Limited, 31 Bow St. 8) May Chas. & Wm. 9 & 11 Garrick St., Covent gdn. 9) May Samuel, 35 Bow St. Covent gdn. 10) Nathan Lewis & Henry, 17 Coventy St. 11) Potter Mrs. Clare, 40 Wellington St. 12) Simmons John & Sons. 35 Haymarket 13) Simmons Barnett J. & Co. 7 & 8 King St. Covent gdn. Costumes on hire or made to order |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

表1 コベント・ガーデン付近にあった衣装店 アルファベット順、店名の表記は住所録通り



図7 R. ホワイトの広告 (1896年)

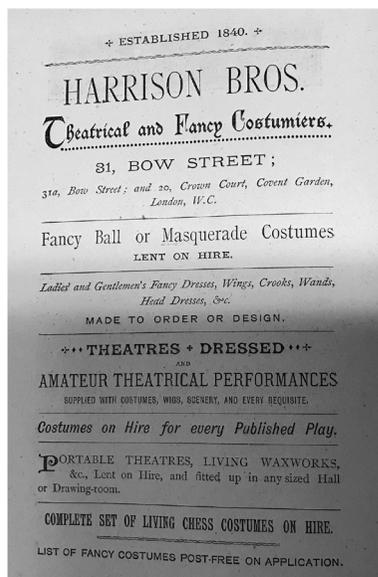


図8 ハリソン社の広告 (1882年) ▶

の間に出版された仮装衣装に関する解説書、およびファッション誌に掲載された広告を調査すると、ボウ街21番地にあったJ. ホワイト(White James)は「演劇用品卸売」⁶⁵⁾で、扱う主な商品は仮装衣装につけるトリミング類だった。30番地のR. ホワイト(White Robt.)も、イミテーションのゴールド、シルバーなどでできた装飾小物を主に扱っていた(図7)⁶⁶⁾。31番地のハリソン社は「女性用、男性用の仮装衣装、かつら、杖、被り物他、オーダーメイド、またはデザインします」⁶⁷⁾と広告し、アマチュア演劇用に衣装、かつら、背景なども扱っていた(図8)。ウェリントン街40番地にあったヘイルズ(Hales Thomas)は、演劇用トリミングの卸売店である。仮装用の模造宝石やトリミング類、化粧品を扱っていた⁶⁸⁾。王室の紋を広告に拝する高級店も同通りにあった。ボウ街35番地にあったサミュエル・メイ(May Samuel)、ウェリントン街27番地のオーギュスト(August)などである。これらの店の多くは演劇誌*The Stage* (12 Oct.-21 Dec.)掲載のコラム、「Theatrical Trade」にも紹介された評判の店だった⁶⁹⁾。

ボウ街とウェリントン街に様々な種類と規模の衣装店があったことがわかった。しかし、透明人間が押し入った衣装店を特定することは極めて困難である。そもそも、うらぶれた店は広告を出さないだろうし、演劇誌に紹介されることもないからである。より重要なことは、透明人間が求めていた衣服はいかにも仮装用の派手な衣装ではなく、人間として自然に見える目立たない服だった。そして、それをコヴェント・ガーデンの衣装店で手に入れることができた点にある。実際、透明人間は十分注意して衣服を整え、結果に満足している。彼は押し入った衣装店の鏡の前に立って、不自然な箇所がないか確かめ、わざわざ合わせ鏡にして、後ろ姿まで確認する念の入れようだった⁷⁰⁾。そして、「少し芝居があった醜さであるけれど、人間として通用しそうだった。」⁷¹⁾と納得するのである。つまり、物色する店を百貨店から衣装店に移しても、「容認できる姿に変装するために服を手に入れる」という当初の目的を変えることなく、完遂したのである。このことは、アマチュア演劇や仮装衣装に興味のある読者のみならず、ウエストエンドを見て回る際のショッピング情報としても有益だろう。

先に指摘した通り、ガイドブックではショッピング情報が欠如しており、このことはストラン

ド地区の衣装店に関しても同じである。一方、同地区の劇場情報は殊の外、詳しく書かれていた。『ありのままのロンドン・ハンドブック』では“**Theatres and Amusements**”の項を立て、ウエストエンドの劇場の住所、演目の種類と席数まで掲載している⁷²⁾。『ロンドン・コンサイス・ガイド、地図付き』でも席の種類と値段、最寄駅を明記し⁷³⁾、『ロンドンの光景、挿絵入り』では、劇場と最寄り駅をセットにしてアルファベット順に示している⁷⁴⁾。衣装店はいずれも劇場のすぐそばにあったから、旅行者は透明人間が提供したストリート情報を参考に、観劇の合間にふさわしい古着を探すことができただろう。

加えて、女性よりもむしろ男性の方がこの界隈を散策しやすかったと考えられる。マイケル・ボールとデイヴィッド・サンダーランドによると、ロンドンでは地域的な専門性が非常に高く、たとえばセント・ジェームズ街(St. James's Street)やジャーミン街(Jermyn Street)には帽子屋、仕立て屋、靴屋、銃を扱う店、シャツ屋、かつら屋、タバコ屋など男性の嗜好品を扱う店が集中していたという⁷⁵⁾。実際、『郵便局ロンドン住所録1895年版』によると、両ストリートと隣接するパルメル(Pall Mall)には仕立て屋(tailor)の他に、軍服を扱う店(military outfitter, military tailor, army tailor)が突出して多く、その数は男性服の仕立て街として有名なサヴィル・ロー(Savile Row)をはるかに凌ぐ。ストランド地区に衣装店が多かったことは考察した通りだが、コヴェント・ガーデンやストランドには、男性客を相手にするタバコ屋、帽子屋、仕立て屋が有名劇場を取り囲むように営業していた⁷⁶⁾。

これら男性の嗜好品を扱う店に加え、ストランドにはレストランも多かった。『郵便局ロンドン住所録』には牡蠣を扱う店(oyster rooms, oyster bar)、カフェ・レストラン(café restaurant)、シアター・レストラン(restaurant, theatre restaurant)など、様々な呼び方で登録されている。図9はストランド343-344番地にあったゲイエティー・レストラン(Gaiety Restaurant)の広告である。『イラストレーテッド・スポーツ・アンド・ドラマティック・ニュース』誌(9 Nov. 1895)に掲載された。ランチは「大衆的な値段」とあるが、アフタヌーン・ティーやディナーは別メニューで提供しており、多様な客層に仕えていたことがわかる。同レストランは1878年に改装され、食事は「美味しく、リーズナブル」と『ありのままのロンドン・ハンドブック』(1879年)は評している⁷⁷⁾。ボール他によると、ゲイエティーは女性客を受け入れる新しいタイプのレストランの一つでもあったらしい⁷⁸⁾。

透明人間もストランドで食事をした。衣装店で古着を盗んだ後、気が大きくなった彼はストランドへ下り、派手に振る舞おうとする。



図9 ゲイエティー・レストランの広告(1895年)

さあ何でも厚かましくやってやるぞ、と考えた。私が何をして、どんな結果になるかは知ったことじゃない。いざとなれば服を脱いで消えてしまうだけのことさ。捕まる恐れはない。金は好きなだけ手に入る。よし一流のホテルに泊まり、豪華な食事を悦しみ、身辺の財産を増やしてゆく⁷⁹⁾。

観光、ショッピング、演劇街での探索の後は食事というわけで、ウエストエンドでの消費にこだわっていることがよくわかる。ストランドで「豪華な食事」を取る場所としては、シンプソンズとサヴォイ・ホテルのグリルが有力候補として考えられる。『ありのままのロンドン・ハンドブック』は1828年創業のシンプソンズを「大広間はフランス料理のレストランのように整えられている」とコメントし、高級レストランであることがわかる⁸⁰⁾。シンプソンズは後に『シャーロック・ホームズ最後の挨拶』収録、「瀕死の探偵」(1913年)の最終場面でも名前が挙がるほど知名度の高いレストランである⁸¹⁾。サヴォイ・ホテルは1889年開業の超豪華ホテルである。創業者は上流階級の顧客を取り込むために、当時ヨーロッパ最高のホテル経営者、セザール・リッツをマネージャーに迎えた⁸²⁾。この戦略は功を奏し、ラパポートによると、「一八八九年にストランドにサヴォイ・ホテルが開かれるとレストランでの食事がお洒落な余暇の過ごし方⁸³⁾になったという。図10はその広告だが、「ロンドンで一番、料理、ワイン共にこの上なし」と豪語し、料金の記載はない。超高級であることは間違いない。ウェルズ自身、サヴォイ・レストランを気に入っていたようで、後年、知人と食事をする約束を何度もしている⁸⁴⁾。また、70歳の誕生日にはペンクラブ主催で、同ホテルでディナー・パーティーも開いた⁸⁵⁾。

滑稽なことに、透明人間は高級レストランで注文をした後に「顔を出さずに食事はできない」ことに気づき、あえなく退散する。代わりに入ったレストランは「特に美味ではなかった」というが、個室で食事をするのができたので、「満足した」⁸⁶⁾と述べている。見てきたように、ストランドには様々な種類のレストランがあったので、選択肢も豊富である。そこそこの店にも個室が備えられ、透明人間の欲求は満たされた。ゲイエティー・レストランの広告にも、「個室完備」と記されている。



図10 サヴォイ・レストランの広告(1895年)

4. 透明であることを証明するための衣服

以上、透明人間が文字通り体を張って周遊したウエストエンドの街並み—下宿→オックスフォード街→大英博物館周辺→トッテンナム・コート街の百貨店→コヴェント・ガーデン付近の衣装店→ストランドのレストラン—を辿った。『透明人間』は、どんなに優秀な科学者でも脆さや弱点を持った人間であるというメッセージを発しているわけだが、人間の基本的身体条件—寒さ

や飢えに対する弱さ—となんとか折り合いをつけることができたのがウエストエンドのツアーだった。彼が標榜した無政府主義や反資本主義は全く役に立たず、衒示的消費の総本山とも言えるウエストエンドでの、特に擬似ショッピングによって彼の命は救われたのである。これ以上のアイロニーがあるだろうか。

一方で、透明であることを除けば、透明人間が一般市民と身体的に差がないことは、彼が展開したウエストエンドの観光、ショッピング、劇場街探索、食事を現実的に見せただろうし、ユーモラスで魅力的にさえしただろう。特にショッピングはウエストエンドの楽しみの一つにも関わらず、ガイドブックに記されることがほとんどなかった。男性読者はもしファッションに興味があるならば、透明人間が提供する驚くほど正確で現実的なショッピング情報を重宝したに違いないし、興味がなくとも、大英博物館を訪れる際にオックスフォード街やトッテンナム・コート街の百貨店、コヴェント・ガーデン界隈の衣装店に立ち寄ってみようと思ったかもしれない。グレート・ポートランド街近くの「大きな服地店」と、オックスフォード街103番地にあったピーター・ロビンソンの男性用部屋着の広告を結びつけることは容易だろうし、トッテンナム・コート街のデパートのモデル、ショールブレットは元々紳士洋品と生地を扱う店だった。ウェルズはショッピングが嫌いだったようだし、若い頃従事した生地屋勤務も嫌っていたというが、透明人間に詳細な商品知識を与え、それを扱う衣料店の種類、場所を正確に辿らせることで、特に買い物が好きというわけではない男性—おそらく多くの男性—が一人で衣服を揃える場合に必要な情報を提供した。

透明人間が辿った道のりは、もちろん歩いて回ることができるが、地下鉄を使うこともできた。『ロンドンの光景、挿絵入り』によれば、大英博物館、トッテンナム・コート街、コヴェント・ガーデン・マーケット、ボウ街、ウエリントン街近くの劇場はいずれも、ディストリクト・アンド・メトロポリタン鉄道(ロンドンの中心部は地下鉄)では、ガウアー・ストリート駅、テンプル駅、チャーリング・クロス駅の3駅が最寄りであり、これらのいずれかで下車すれば、徒歩でたどり着くことができると想定されている⁸⁷⁾(現在では、大英博物館はピカデリー線のラッセル・スクエア駅、トッテンナム・コート街はセントラル線、ノーザン線のトッテンナム・コート・ロード駅、コヴェント・ガーデン・マーケットとその周辺はピカデリー線のコヴェント・ガーデン駅、またはピカデリー線、ノーザン線のレスター・スクウェア駅で、それぞれ最寄り駅が異なる)。また、ロンドン市内の足として重宝されていたバスを使うことも可能である(バスといっても、当時はまだ馬が引く乗合馬車である)。バスの多くは、透明人間が周遊を始めたオックスフォード街や、食事をしたストランドを通り、ロンドンに鉄道で入って来る旅行者が使うターミナル駅からの便もよかった。例えば、「ロイヤル・オーク」号はベイズウォーターからパディントン駅(グレイト・ウエスタン鉄道のターミナル)、オックスフォード街を経由して、サウス・イースタン鉄道のターミナル駅前、チャーリング・クロスまで行く。ストランドを通るほとんどのバスは、チャーリング・クロスに留まった⁸⁸⁾。バスや鉄道の運行情報はガイドブックに詳しい。透明人間が提示したウエストエンドの周遊はロンドン中心部に住む人だけでなく、郊外や地方からの旅行者も実際に楽しむことができたのである。

では、ウェルズがこれほどまでに透明人間の衣服調達に手間暇かけた最大の理由は何だろう。作品は主人公が透明になり、様々な悪事を犯し、アナーキズムに走る物語である。主人公が透明

であることが最重要事項だが、これを他の登場人物や一般読者—科学知識とは縁遠い、アイピング村の無知で頑迷な住人を含む—に信じさせるためには、主人公は服を着ている必要があった。着ている服を目の前で脱いでこそ、彼の体が透明であることが証明されたからである。このことは第7章で明かされる。窃盗容疑で彼を逮捕しようと駆けつけた巡査を前に、透明人間は次々に服を脱ぐことで、顔だけでなく(顔がないことは同章前半部ですでに明かされていた)身体全体が透明であることを示すのである。

男はチョッキに沿って腕を動かした。すると奇跡が生じたかのようにボタンが次々とはずれて行った。それから彼は何かつぶやいて、しゃがみ込んだ。どうやら靴と靴下をいじっているようだった。

「あれ！」

ハクスターが素っ頓狂な声をあげた。

「こいつは人間じゃない。空の服だけだ。見ろ！袖口から裏地まで見えるぞ。腕を入れられそうだ…。」⁸⁹⁾。

透明人間を「空の服」と表現していることに注意したい。恐怖と喜劇が入り混じったこの場面は物語前半のクライマックスである。この種明かしを機に透明人間は凶暴性を増し、犯罪を犯しながら逃げ回るからだ。したがって、作者はどのように主人公が透明になる決意をし、実際に透明になり、しかし、服を調達しなければならなかったかを詳細に説明する必要があったのである。

衣服に直接言及しているわけではないが、『ブックマン』(New York: 6 Dec. 1897)に好意的な書評を書いてウェルズに大いに感謝されたエドモンド・ゴス⁹⁰⁾も同書評の中で、作者は人が透明になるという途方もないことを読者に信じるよう求めるが、「その詳細は一貫性と必然性」があると述べ、つじつまの合う詳しい状況説明を高く評価している⁹¹⁾。明らかに、ウエストエンドでの衣服調達は、透明人間に存在証明を与えた。ごく普通の衣服—「少し芝居掛かった醜さであるけれど、人間として通用しそうだった」—であっても、わざわざウエストエンドを周遊して求め、読者に印象付ける価値は十分あったのである。

図版出所

図1 *Royal Atlas of England and Wales*. John Bartholomew & Co., c1896, Plate 62 より部分拡大

図2 “Advertisements”, *The Illustrated Sporting and Dramatic News* (25 Apr. 1896) , n.p.

図3 Morrison, Kathryn A. *Ibid.*, p. 126.

図4 “Advertisements”, *The Queen* (4 Jan. 1896) , n.p.

図5 *The London Tailor*. (Jul. 1897) quoted from Breward, C. *Ibid.*, p. 38.

図6 *Royal Atlas of England and Wales*. *Ibid.*

図7 “Advertisements”, *The Queen* (4 Jan. 1896) , n.p.

図8 Holt, Ardent. *Ibid.*, n.p.

図9 “Advertisements”, *The Illustrated Sporting and Dramatic News* (9 Nov. 1895) , n.p.

図10 *Ibid.*, (21 Sept. 1895) , n.p.

表出所

表 *Post Office London Directory for 1895, 1896*.

註

- 1) Alison Adburgham, *Shops and Shopping 1800-1914*. London: George Allen and Unwin, 1964, p. 199.
- 2) H. G. Wells, *The Invisible Man*. Harper & Brothers, 1897, Chap. 22, pp. 198-199. 日本語訳は次を参照するが、通りの名称、服飾用語など省略されている場合は筆者が補うこととする。H.G. ウェルズ、橋下楨矩訳『透明人間』。岩波文庫、2016、p. 171.
- 3) H. G. Wells, *Autobiography*. IV “Early Adolescence, 1 Forth Start in Life—Southsea” (1881-83) London: Faber, 1984, p. 184.
- 4) *The Invisible Man* 出版当時の書評は Ingvald Raknem, *H. G. Wells and his Critics*. George Allen & Unwin, 1962, pp. 446-471 と William Scheik & J. Randolph Cox ed. *H. G. Wells: A Reference Guide*. Boston: G. K. Hall & Co, 1988, pp. 6-11 に基づき調査した。
- 5) Erika Diane Rappaport, *Shopping for Pleasure*. Princeton and Oxford: Princeton UP, 2000. エリカ・ダイアン・ラバポート著、佐藤繭香他訳『お買い物は楽しむため』。彩流社、2020、p. 289.
- 6) ラバポート同上、p. 27.
- 7) Lady M. Jeune, “The Ethics of Shopping”, *Fortnightly Review* 57 (January 1895), pp. 123-132.
- 8) Christopher Breward, *The Hidden Consumer: Masculinities, Fashion and City Life 1860-1914*. Manchester and New York: Manchester UP, 1999, pp. 178-179.
- 9) *Ibid.*, Chaps. 2, 3, 4.
- 10) Anon, *Handbook to London as It Is*. London: John Murray, 1879, p. 295.
- 11) Anon, *Sights of London illustrated*. London: Henry Herbert & Co., 1883, pp. 2, 6.
- 12) Anon, *Concise Guide to London, with Map, etc.* London: John and Robert Maxell, 1885, pp. 13, 14.
- 13) Anon, *Handbook to London as It Is*, *Ibid.*, pp. 20-21.
- 14) *Ibid.*, p. 21.
- 15) Martin Stephen, *H. G. Wells: The Invisible Man*. London: Longman York Pr., 1980, p. 7. David C. Smith ed., *The Correspondence of H. G. Wells*. London: Pickering & Chatto, 1998, vol. 1, p. xlv.
- 16) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 17, pp. 142-143. H.G. ウェルズ、前掲書、pp. 129-130.
- 17) *Ibid.*, Chap. 19, p. 166. 同上 p. 148.
- 18) *Ibid.*, Chap. 19, p. 167. 同上 p. 149.
- 19) *Ibid.*, Chap. 20, p. 170. 同上 p. 151.
- 20) *Ibid.*, Chap. 20, p. 178. 同上 p. 157.
- 21) *Ibid.*, Chap. 24, p. 230. 同上 p. 191.
- 22) Paul A. Cantor, “The Invisible Man and the Invisible Hand”, *American Scholar* 68 (1999), pp. 89-103. Quoted from Deaglan O Donghaile, “Anarchism, Socialism and *The Invisible Man*”, *The Wellsian*. No. 35, 2012, p. 24.
- 23) O Donghaile, *Ibid.*, p. 31.
- 24) Martin Stephen, *Ibid.*, p. 58. 左記著者と似たような指摘はすでに複数の書評でなされているので記しておく。
 “Mr. Wells presents his odd fancies [*The Plattner Story, and Others, The Invisible Man*] in a strong setting of prosaic circumstances. This does not mean that he finds strangeness in everyday life, but rather that he would render strange occurrences convincing by backing them with homely circumstances.” “Mr. Wells’s New Stories”, *The Saturday Review* (London) 84 (18 Sept. 1897), pp. 321-322. “The whole thing is extremely well managed, and all the probability possible is given to a situation which is inherently impossible.” “Recent Fiction”, *The Dial* 23 (16 Dec. 1897), p. 390.
- 25) Martin Stephen, *Ibid.*, p. 50.
- 26) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 20, p. 169. H.G. ウェルズ、前掲書、p. 150.
- 27) Alison Adburgham, *Ibid.*, pp. 142-143.
- 28) 1874年創刊の同誌はスポーツ・イベントの結果、演劇の紹介、フィクションを掲載する雑誌である。
- 29) *Post Office London Directory for 1895* by Kelly’s Directories Ltd.
- 30) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 21, p. 189. H.G. ウェルズ、前掲書、p. 165.

- 31) Martin Stephen, *Ibid.*, pp. 48-50.
- 32) Peter Haining ed. *The H. G. Wells Scrap Book*. London: New England Library, 1978, pp. 59-62.
- 33) “Chronicle and Comment”, *The Bookman* (New York) 6 (Nov. 1897), p. 178-179.
- 34) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 22, p. 198. H.G. ウェルズ、前掲書, p. 170.
- 35) *Royal Atlas of England and Wales*, John Bartholomew and C., c1896.
- 36) *Post Office London Directory for 1896*によると、以下の住所登録あり：17 Bloomsbury Square, Pharmaceutical Society of Great Britain.
- 37) Linda Nead, *Victorian Babylon*. New Haven and London: Yale UP, 2000, pp. 58-59.
- 38) ジェフリーズによると、百貨店とは「一棟の中に別個の売り場が4つ以上あり、それぞれが異なる種類の商品を売り、そのうちの一つが女性服と子供服」である。
James. B. Jefferys, *Retail Trading in Britain 1850-1950*. Cambridge: Cambridge UP, 1954, p. 326.
- 39) *Post Office London Directory for 1896* by Kelly’s Directories Ltd. には、それぞれ以下の所在地と扱う商品が登録されている。Heal & Son: 195 to 198 Tottenham Court Rd., upholsterer & cabinet maker. Maple & Co.: 141, 142, 143, 144 & 145 to 149 Tottenham Court Rd., upholsterers, cabinet makers & carpet importers. Shoolbred James & Co. 151 to 158 & 161 & 162 Tottenham Court Rd., line & woolen drapers, cabinet makers & upholsterers.
- 40) Alison Adburgham, *Ibid.*, pp. 13-14.
- 41) *Ibid.*, p. 142.
- 42) *Ibid.*, p. 46.
- 43) *Ibid.*, pp. 14, 67.
- 44) James. B. Jefferys, *Ibid.*, p. 326.
- 45) Kathryn A. Morrison, *English Shops and Shopping*. New Haven and London: Yale UP, 2003, pp. 135-138.
- 46) James. B. Jefferys, *Ibid.*, p. 326.
- 47) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 22, p. 201. 日本語訳該当部分なし。
- 48) “Jaeger celebrates 125 years in the business”, *The Daily Telegraph* (23 Jan. 2009), n.p.
- 49) Farid Chenoune, *A History of Men’s Fashion*. Paris: Flammarion, 1993, pp. 99-100.
- 50) Victoria and Albert Museum T.168-1960
- 51) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 22, p. 201. H.G. ウェルズ、前掲書, p. 172.
- 52) Penelope Byrde, *The Male Image: Men’s Fashion in Britain 1300-1970*. London: B. T. Batsford, 1979, p. 88.
- 53) Christopher Breward, *Ibid.*, p. 40.
- 54) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 22, p. 199. H.G. ウェルズ、前掲書, p. 171.
- 55) H. G. Wells, “The Shopman”, *Certain Personal Matters: A Collection of Material, Mainly Autobiographical*. London: Laurence & Bullen, 1898, pp. 119-125.
- 56) ラバポート、前掲書, p. 211.
- 57) ラバポート、同上, p. 211.
- 58) Cynthia Cooper, *Magnificent Entertainments*. New Brunswick: Goose Lane Editions and Canadian Museum of Civilization, 1997, pp. 21-38. Anthea Jarvis and Patricia Raine, *Fancy Dress*. Bucks: Shire Publications, 1984, pp. 5-22. Rebecca N. Mitchell, “The Victorian Fancy Dress Ball, 1870-1900”, *Fashion Theory*. 2016, Vol. 21, Issue 3, pp. 291-315.
- 59) W. J. Sorrell, *The Amateur’s Handbook and Guide to Home Drawing Theatricals*. London: Thomas Hailey Lacy, 1866, p. 34.
- 60) ラバポート、前掲書, p. 294.
- 61) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 23, p. 210. H.G. ウェルズ、前掲書, p. 178.
- 62) *Ibid.*, Chap. 23, p. 209. 同上, p. 177.
- 63) *Ibid.*, Chap. 23, p. 210. 同上, p. 178.
- 64) *Ibid.*, Chap. 23, pp. 219-220. 同上, p. 183.
- 65) Marie Schild, *Characters Suitable for Fancy Costume Balls*. London: S. Miller, 1881, p. 36.

- 66) *The Queen*. Jan.-Jun. 1896, n.p.
- 67) Ardent Holt, *Gentlemen's Fancy Dress; How to Choose It*. 2nd ed. London. Wyman & Sons, 1882, n.p.
- 68) Marie Schild, 1881, *Ibid.*, p. 66.
- 69) Michael R. Booth ed. *Victorian Theatrical Trades*. London: The Society for Theatre Research, 1980.
- 70) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 23, p. 220. H.G. ウェルズ、前掲書, p. 184.
- 71) *Ibid.*
- 72) Anon, *Handbook to London as It Is*. *Ibid.*, p. 55.
- 73) Anon, *Concise Guide to London, with Map, etc*. *Ibid.*, p. 57-60.
- 74) Anon, *Sights of London illustrated*. *Ibid.*, pp. 99-101.
- 75) Michael Ball and David Sunderland, *An Economic History of London, 1800-1914*. London and New York: Routledge, 2001, pp. 126-127.
- 76) *Post Office London Directory for 1895*. *Ibid.* もっとも、マイケル・ボールとデイヴィッド・サンダーランドはこれと異なる見解を示している。(*Ibid.*, p. 127)
- 77) Anon, *Handbook to London as It Is*. *Ibid.*, p. 53.
- 78) Michael Ball and David Sunderland, *Ibid.*, p. 156.
- 79) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 23, p. 221. H.G. ウェルズ、前掲書, p. 185.
- 80) Anon, *Handbook to London as It Is*. *Ibid.*, p. 53.
- 81) コナン・ドイル著、延原譲訳『シャーロック・ホームズ最後の挨拶』新潮文庫, 2014年, p. 237. シンプソンズ・イン・ザ・ストランドのHPにも以下のように掲載されている。Sherlock Holmes and Dr Watson dine with us at the end of The Adventure of the Dying Detective, where after fasting for three days, Holmes tells Watson, "Something nutritious at Simpson's would not be out of place."
- 82) Michael Ball and David Sunderland, *Ibid.*, p. 155.
- 83) ラバポート、前掲書, p. 173.
- 84) David C. Smith ed. *Ibid.*, vol. 3, pp. 343, 473-474.
- 85) *Ibid.*, vol. 4, pp. 100-101.
- 86) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 23, p. 222. H.G. ウェルズ、前掲書, pp. 185-186.
- 87) Anon, *Handbook to London as It Is*. *Ibid.*, pp. 99-101, 134-140. 同様の記述は『ロンドン・コンサイス・ガイド、地図付き』(pp. 118-121)にも見られる。
- 88) *Ibid.*, pp. 42-47.
- 89) H. G. Wells, (1897), *Ibid.*, Chap. 7, pp. 67-68. H.G. ウェルズ、前掲書, p. 64.
- 90) David C. Smith ed. *Ibid.*, vol. 1, p. 299.
- 91) Edmund Gosse, "The Abuse of the Supernatural in Fiction", *Bookman* (New York) 6 (Dec. 1897), pp. 298-299.